



特集

上林 暁

意志と善意の人——自らの惨苦を見すえた不撓ふたうの作家——

その2

——その2——のはじめに

今年三月二十七日、御逝去なされた河盛好藏先生は、上林文学にも精通され、こよなく親愛なさっていた。お亡くなりになる二ヶ月前、拙稿第一回をお読みになられた先生は、身に余るありがたいお言葉をお寄せ下さった。

河盛先生は、上林先生と同年同月のお生まれでもあり、特にお親しかったからでもあるが、このような小稿にまで温かいお心づくしを賜るとは、感激の極みである。つしんでこの第二回の拙稿を御霊前に捧げ、御冥福をお祈り申し上げる。

病床以前(昭和33年春)の筆跡

四万十川の
青き流れを
忘れめや
上林 暁

「梨の花」の色紙

——苦難の文字の

自然破形美——

小林 亥一

上林先生の御病気を脳出血と書いてきた。これは昔からいわれてきた中気(中風、風疾)で、そうなった人々のほとんどは、半身不随となるが、ときには全身が麻痺してしまう場合もあるという。先生の場合は、右半身不随ではあったが、一時は危険な容態だったほどで、左半身も順調に機能されているわけではなかった。だが、左手が何とか働いたことは、まことに幸いであつた。左手の指に4Bを支え、文字をお書きになるまでの御辛勞は、はかり知れないほどだったとしても、口述筆記や他の方法では、円熟の上林文学は生まれなかったであろう。

上林先生が亡くなられて二年後、令妹睦子さんが、病床の兄君との生活記録を出版されたことはすでに述べたが、筑摩書房刊のこの名著は、世人に強く深い感銘を与えた。井伏鱒二先生は、睦子さんへのお便りの中で、次のように述べておいでになる。

私は旅中に居りますが、さっそく拝読し、ことごとく感心しました。云ひ尽せぬ御苦勞がありましたことせう。頓首再拝の思ひです。

睦子さんがその書名を、『兄の左手』と定められたのは、まことに意味が深い。

上林先生が、河北病院から退院なさつて、天沼のお宅に帰られたのは、昭和三十八年二月。庚申湯で倒れられてから四ヶ月後のことであつた。それから間もなく口述筆記による、あの「白い屋形船」に取り掛かり、一ヶ月近くで完成されたというが、筆録に当られた睦子さんの御苦心は、想像に余りある。この「白い屋形船」に限り、病後早い時期に、口述なされたために、夢幻の世界が、かえつて効果的な表現となつたとも考えられる。しかし、その時点で、先生が文字をお書きになれる状態であつたとしたら、ためらわず原稿用紙に向かわれていたはずである。「白い屋形船」の外、口述筆記による短編は四編だったというが、いつから口述を止められたか、正確な年月は分らない。昭和三十九年の終わりでころではなかっただろうか。左手の機能がわずかながらでも働くと思われた先生は、何とかして文字を書きたいと念願なさつたし、また、何とかしてでも書かなければならなかったのだ。口述筆記という間接的作業から、「書く」ことに改められなければならない必然性があったのである。

あの葛原勾当も、二十六歳までの十年間は、口述によって琴の稽古日記や思うことを述べてきた

が、木製活字によって押印するようになってからは、口述によることはなかった。盲人の勾当には、押印が「書く」ことだったのだから。勾当の文字表記法と、タイプライターやワープロによる表記法とは似ている点がある。現在、ワープロを用いる作家が多いのだが、その作家にとっては、それが「書く」ことであり、従来のペンによる表記と、想念では変わるところがないであらう。

文章に携^{たづな}わる仕事で、もつとも大きな障害は、想が乱され、妨げられることであろう。やむを得ず口述によらなければならぬ場合もあるが、その表現は、筆者自身が直かに「書く」ことは、微妙な点で異ってくるのである。「書く」ことが間接化されると、作者は無意識のうちにおのずから想が乱されてしまう。「話すこと」と「書くこと」とは、曰^{いわ}くいい難い相違があるのだ。能うる限り自身で「書か」なければならぬ。

上林文学で異彩を放つといわれる「白い屋形船」も、口幅^{くはば}つたい私見を許していた。だくならば、上林先生が直かに書きになっていたとしたら、靈筆の光芒は、さらに鋭く放たれたのではなからうか。

上林先生が一番おそれられたことは、想の乱れであつたに相違ない。長年月右手に持たれてきたペンを、左手の4Bに持ち換えられはしたが、直かに書くという「一の芸」を、終生貫き徹されたのである。十数年間、文字を書くことにすさまじい執念を燃やされつづけた日々は、『兄の左手』に活写されているが、私も伺うたびにその御様子に接し、胸いっぱいになってしまうことがしばしばだった。次の拙詠はそのころの

もの

4Bをゆん手に支え臥^ふ伏^ふして
綴らす文字の涙ぐまし

著名な劇作家丁女史の述懐は、上林先生左手書きの文字の困難さを、よく表している。彼女が天沼へお見舞いに伺った折、先生の御本に署名をお願いしたそうである。ところが、書き終わられるまでのすさまじさに驚倒し、お願いしたことが悔まれたという。私も、気易く署名をお願いできなかった。新刊書を下さるときは、署名なさるのであるが、感激しながらも息づまる思いで拝見していなければならなかった。文字をお書きになるのが、いかに容易でないかは、先生のお側にい合わせた者でなければ分らない。

二十数年前、私も一ヶ月近く、上林先生の真似ごのような文字表記をしなければならなかった。右腕の怪我で指がしびれ、字が書けなくなったからだった。右利きの



昭和33年8月 香北町永瀬ダムにて

私は、左書き^{さき}の文字が想像以上に書きづら
いことを実感した。しかし、自然に破形の
文字が生まれ、上林先生の書に似通う点も
あって、以後左手で書こうかと考えたりし
たほど、うれしがったりもした。

上林先生からいただいたお葉書の中に、
「まだ よくなりませんが なんぎなこと
でせう お大事に ポクは げんきです」、
という一葉がある。これは、私が左手書き
のお便りを差し上げた折の御返書である。

先生に似た文字の拙信は、お慰めするつも
りもあつたのだが、反対に私を勞つて下さ
っているのだ。

同じ左手書きとはいっても、上林先生の
場合は、私なんかの一時的なものとはまっ
たく事情が異つていた。そんな生易しいこ
とではなかった。左手の握力は強くなられ
たが、運筆は意に委せず、横臥^{へい}か仰臥^{よう}され
てお書きになるのだから、文字は甚しく変
形してしまうのである。文字の形を成さな
い場合もあるし、判読に苦しむことも少な
くはなかったのだが、ごく稀には驚くほど
整つた文字のお便りを下さつたこともある。
だが、ほとんどは難解な文字で占められて
いた。お書きになった原稿もお便りと同様
に。そのような上林先生の文字を、「曉文
字」と仮称させていた。だいて、私なりに感
じていることや私見を述べようと思う。

「悲願の原稿」には、私が初めて先生の
原稿を拝見したときのことを、左のように
書いている。

これまで見たこともない原稿の一字
一字に、「何とか文字になつてくれ！」
という悲願が込められているようで、
それに深く打たれたからであつた。私
はふと、その筆致に良寛の書の風韻を

覚えた。

「良寛の書の風韻を覚えた」のは、感覚
的な閃きとしてではあつたが、それはなぜ
だったのだろうか。

一般には、良寛の書は何とも読みにくく、
難解なものとしてされている。読みにくさとい
う点では、上林先生の原稿の文字も、良寛
にひけをとらないが、無論、その共通点だ
けが、私に「風韻を覚え」させたわけでは
ない。

「曉文字」を良寛の書と関連づけたる
ことは、いかなる点からであつても、と
んでもない暴論と指弾され、嘲笑をさえ招
くことになるかもしれない。

良寛の書は、きわめて芸術性の高い神品
といわれている。その書に通曉し、深く理
解することも容易ではないが、理解の助け
となる鍵の一つとして、柳宗悦の破形の論
は、簡潔明快である。

凡そ真実な芸術は、何らかの意味で
破形を示さぬ場合はない。何故なら自
由を追えば整形を破らざるを得ぬから
である。（「奇数の美」による）

極度に破形を示す良寛の書は、長年の研
鑽^{けん}と良寛独自の天稟^{てんりやう}によつて到達した至
芸である。「自由を追う」ことからさえ自
由になった、そのような境地から生まれた
破形ではなからうか。

以下次号に続く

付記

拙稿第一回を読まれて、筆者に励まし
のお便りを下さつた方もある。感謝に堪え
ない。

平成12年度 大府あかつき館事業計画

【文化振興係】

1. 上林曉文学館関係事業

- | | |
|---------------------|----------|
| ① 上林暁文学館協議会 | 4 回 |
| ② 小企画展（色紙、書簡類、生原稿等） | 1 回 |
| ③ 大方の歴史を語る会 | 6 回（奇数月） |
| ④ 上林暁文学講座 | 4 回 |

日	時	講 師	演 題
第1回	8月27日(日) 13:30～	坂本 稔 (詩 人)	「書くことの楽しさを求めて…」
第2回	9月24日(日) 13:30～	山川 禎彦 (作 家)	「上林暁と私小説」
第3回	10月15日(日) 13:30～	宮川 昭男 (前田ノロ小学校長)	「梢に咲いてゐる花よりも」
第4回	11月26日(日) 13:30～	吉村 稠 (園田学園女子大学教授)	「上林暁の私小説の特質」

受講料…無料（但し実費が必要な場合は頂くことがあります。）

- ⑤ 大方の秋まつり 平成12年11月11日（土）～12日（日）

★ 第6回上林曉忌俳句大会のお知らせ

日 時 平成12年8月20日(日)13:00～

会 場 ふるさと総合センター

主 催 上林曉顯彰會



2. 町立図書館事業

- ① 図書館協議会 4回
② 図書館だよりの発行 月1回
③ 催しもの

日 時	内 容	場 所
平成12年9月10日～ 平成12年9月23日	田島 征三 原画展	大方あかつき館 町民ギャラリー
平成11年10月22日（日） 14：00～15：30	尼子 騒兵衛 講演会	大方あかつき館 レクチャーホール
平成12年12月 冬休み	原ゆたかのマンガ教室	大方あかつき館 会議室
平成12年8月	市原 麟一郎 後援会	大方あかつき館 レクチャーホール
毎週日曜日 10：30～11：30	絵本の読み聞かせ 紙芝居、ビデオ上映など	図書館子供室 レクチャーホール

生涯学習

1. 生涯学習事業

(1) 青少年健全育成親子ふれあい事業

計画月	行	事	名
4 月	春の親子登山		
8 月	夏休み親子木工教室（対象：小学生） 四万十川くだり（対象：小学校5～6年生） ワールドクッキング（対象：小・中学生）		
平成13年1月	新春かきぞめ大会（対象：小・中学生）		
" 2月	わんぱくスキー教室（対象：小学校6年生）		

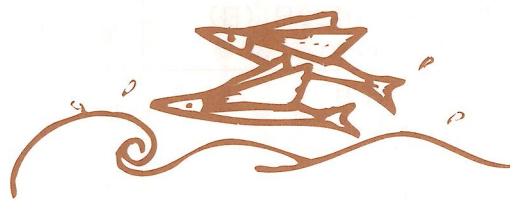
(2) 第11回大方町民大学ピック・かれっじ21（9月～11月）……6講座

(3) 女性講座（9月～1月）……3回

(4) 家庭教育講座（10月～1月）……5回

2. 生涯スポーツ事業

計画月	行	事	名
4	学校体育施設利用説明会 ペタンク大会		
5	はだしマラソン全国大会 ゲートボール大会 幡多地区春季スポーツ大会 ニュースポーツ教室		
6	ニュースポーツ教室 体育会総会 体育指導員宿泊研修		
7	高知県ニュースポーツ研修 こども会ソフト・キック大会 県民スポーツフェスティバル・ソフトボール予選 ニュースポーツ教室		
8	ユージュペタンク大会 県民スポーツフェスティバル・ゲートボール予選 県民スポーツフェスティバル・野球予選 幡多地区こども会スポーツ大会 市町村対抗球技大会		
9	高知県体育指導員研修会 ニュースポーツ教室 県民スポーツフェスティバル		
10	ニュースポーツ教室 大方町少年剣道大会 スポレクフェスタ大方		
11	ニュースポーツ大会 全国体育指導委員研究協議会		
12	大方少年駅伝大会		
1	大方町民マラソン大会 四国地区体育指導委員研修会		
2	市町村対抗駅伝大会 あしずり駅伝大会 生涯スポーツ県民会議		
3	大方町スポーツ賞表彰式 大方町民駅伝大会兼四国の道駅伝大会 ジュニアバスケットボール大会 バードランド周回駅伝大会		



大方あかつき館

〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3 TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222